

大東文化大学合同研究会「大河内文庫を考える―大河内一男を中心に―」

第1部 大河内文庫創設の経緯及び文庫の特徴について

「大河内文庫所蔵の原史料について」

大東文化大学法学部政治学科教授 武田知己  
大東文化大学法学研究科博士課程前期課程2年 金子貴純

はじめに

私たちの報告では、以下、大河内文庫が所蔵するいわゆる「原史料」について、その概要をお話致します。この原史料が本学に所蔵される詳しい経緯については（正式の寄贈契約は目録作成後に行う予定でいるとのことです）、大杉氏の報告にあります。ここでも簡単に触れておけば、2008年春より大河内暁男東京大学名誉教授から、暁男先生の蔵書のみならず、大河内一男東京大学元総長（社会政策学者、1905-84）および暁男先生の昭子夫人の蔵書・資料の寄贈を受け、翌年から図書と雑誌の整理が開始されていますが、いわゆる原史料については、2012年になって、山本彰氏によって着手され、山本氏を引き継いだ鶴田香織・長田幸枝の両氏が、2014年4月の段階で、紙のボックス204箱に整理されました（いずれも本学図書館職員。改めて感謝申し上げます）。

我々は、その後、2014年4月に、白石裕子図書館長にお声がけいただき、整理を開始したところでございます。その意味で、原史料が大河内家にあった時の原状は不明です。現在は、目録作成のために一点一点採録しているところで、今月までに67箱の整理が済みしました。その殆どは金子が行いました。なお、2008年の段階で殆どの原史料が搬入されたようですが、その後、大杉氏により追加されている原史料もありますし、本日知りましたが、2011年に東京大学経済学部図書館にも一部寄贈されたようですので、全貌はまだ不明の部分があるということをお知らせ申し上げます。

資料1 大東文化大学への搬入の経緯（図書館などの記録より、武田作成）

2008年 大河内暁男氏より図書・雑誌・その他の寄贈を受ける

2009年 受け入れ整理開始

2011年 図書及び雑誌の受け入れ整理完了

2012年 『大東文化大学図書館所蔵大河内文庫目録』完成

→2008年の寄贈の際にほとんどの原史料が搬入されたと思われる。

2012年以後 原史料の整理

（山本彰氏が着手、2013年6月より鶴田香織氏、長田幸枝氏のご尽力による）

2014年4月 204箱に分類した原史料の整理を開始

→原史料の「原状」はもはや不明

→2014年4月以降、まずは204箱のボックスごとに一点一点採録している状態

## 資料2 現在の保管状況（2015年7月現在）



### 原史料とは何か

ところで、「原史料」という言葉ですが、大杉氏の報告にあるように、実は広く歴史学界といっても、経済史と政治史あるいは外交史では、中心としてイメージするモノに大きな差があることがしばしばです。

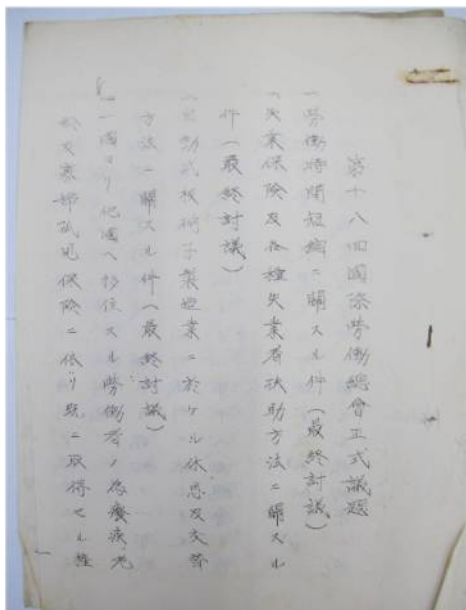
一次資料（ここでは「史料」ではなく「資料」としておきます）とは、「研究対象の実態を明らかにするあらゆるデータ」を意味するとしまして（歴史資料という意味で我々は「史料」という言葉を普通に用います）、二次資料を「一次資料を用いた研究」と簡単に定義しますと、経済史では、例えばアダムスミスの国富論の初版本は貴重な「原史料」であり、統計資料も重要になるでしょう。しかし、我々のような政治史研究者にとっては、大河内一男の活動記録である「日記」や「書簡」が何より重要であり、彼が関わった昭和研究会や海軍大学校関係の資料（後述）により興味を引かれます。「一点モノ」という言い方をすれば、こういう資料は他の史料群にいくつか散見されるものもありますが、少なくとも、大河内自身のメモのある配付資料はここにしかない「一点モノ」にほかならず、数百万する国富論に全く遜色ない、「プライスレス」に貴重な資料になります。

### 大河内文庫の原史料の特徴

さて、以下では、そういった観点から「原史料」を定義しますが、大河内文庫「原史料の部」は、実は、どれが一男のもので、どれが他の親族のものかがわからなくなっております。また、その資料が、いつの時点で収蔵されたのかも不明になってしまいました。大河内は、多くの本を執筆しておりますし、中には政治史・政治思想史関係も少なくありませんので、そういった執筆資料として、本文庫に収蔵された戦前の原史料を入手した可能性もあるわけです。

それを完全に選別することはほぼ不可能になっていますが、例えば、現時点では、菊川忠雄という人物が収集した戦前の社会運動の資料がございますが、これは、東京大学の林茂研究室で一時整理していた資料群であることがわかっています。そのごく一部が誤って大河内一男の元に紛れ込んだのでしょう。調査次第で、いわゆる資料の経緯が明らかになる部分もあることは間違いありません。

資料3 菊川忠雄資料の一部（当日配布した資料より）



■大河内文庫の原史料の特徴

①一男氏のものか、ご子息のものか、他者のものかわからないものが混入している

【資料1】第十八回国際労働総会正式議題  
作成年月日不明

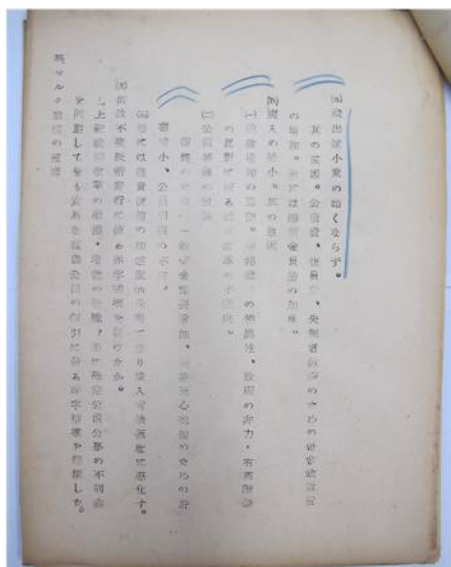
戦前の社会運動の立役者の一人である菊川忠雄の関係資料。東京大学社会科学研究所の林茂研究室により収集されていたものの一部と思われる。

しかし、少なくとも三人の史料がミックスされた故に、ここにはバラエティーに富む分野の原史料が集められました。暁男氏、昭子氏の史料については大杉氏の報告にありますので、以下では一男史料（と推測されるもの）に限っていくつかを紹介したいと思います。

一つは、一男が関わった諸団体のものです。比較的よく知られているのは、戦前の国策研究会、昭和研究会でしょうが、そのほかにも、昭和19年に設置された社団法人「調査研究動員本部」<sup>1</sup>の資料、また、海軍大学校関連資料や、現時点では詳細が不明ですが「国防国家学会」なるものの改組に関連する資料（昭和17年作成）なども興味深いものです。

<sup>1</sup> 「調査研究動員本部ニツイテ」（昭和19年4月11日 閣議決定）によれば、「現下ノ戦局ニ対応シ大東亜戦争ヲ勝ち抜ク為ニハ国民全般ノ智能ヲ総動員シ苟モ用フベキ調査研究ノ成果ハ悉ク之ヲ戦力増強ノ為ニ活用スルノ要アリ依ツテ新ニ調査研究動員本部ヲ設置シ政府ト緊密ナル連繫ノ下ニ主トシテ民間ノ行フ調査研究ノ成果ヲ総合的ニ動員スルモノトス」とされた。東亜研究所の直轄機関であるが、「同本部ハ内閣総理大臣ノ所管ニ属スルモノトシ同本部ト各官庁及各政府調査研究機関トノ連絡ハ内閣ニ於テ之ヲ行フ」とされた。母体は、「社団法人調査研究連盟」である。

#### 資料4 調査研究動員本部の資料（当日の配付資料より）



■大河内文庫の原史料の特徴  
②研究会・審議会など諸団体関係資料

【資料3-2】独逸の戦時戦後インフレーションと我国のインフレーションとの比較(調査研究動員本部)  
昭和20年6月

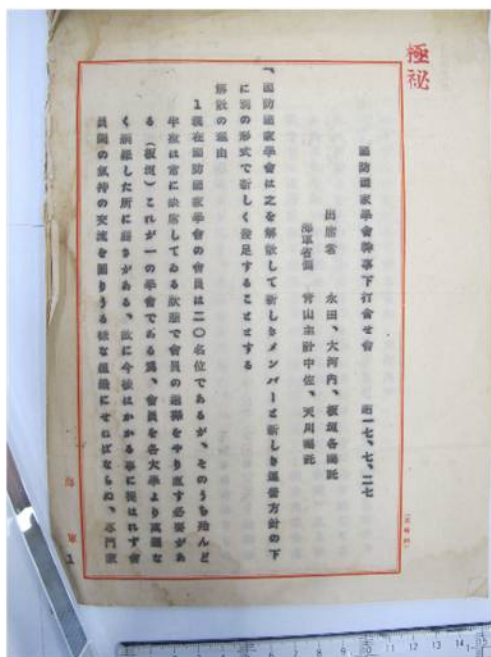
また、政治史的に見れば、官公庁関係の資料も興味深いといえます。兼田氏の報告にあったような厚生省関連資料は比較的多く収蔵されており、労働組合や社会党などの政党関連の資料も若干収められています。また、萩原氏の報告にあった初期社会主義あるいは共産主義に関する資料（政党のビラや雑誌類）も貴重なものであると推測されますし、法制史関連でも手書きの原史料やガリ版刷りのものが多数残されています。

さらに、時期も比較的長いスパンで収集された史料群となっています。明治中期の足尾銅山関連の資料から第二次臨調関連の資料まで、あるいは江戸の稀観本や90年の雑誌の類までを視野に入れば、大河内文庫・原史料の部は、100年あるいはそれ以上の期間に亘る史料群だといえるように思います。

#### 大河内文庫所蔵の原史料の問題点

しかし、すでに述べたように、「来歴不詳」の原史料が多いということと関連しているのですが、例えば、先述の国防国家学会に関しては、一男が出席しており、会の民主的運営を主張していることが議事録から確認できますが、そういった手がかりがないものも少なくありません。一男の回想録などに書かれていない記録や資料から大河内の足跡をどれだけ復元できるかは難しいところもあります。

資料5 国防国家学会幹事下打ち合わせ会（昭和17年7月27日）



■大河内文庫の原史料の留意点  
③自伝・回想で触れられていない活動に関連した資料をどのように意味づけるか

【資料11】国防国家学会幹事下打ち合わせ会  
昭和17年7月27日

国防国家学会の改組に関して、永田清、大河内一男、板垣與一が中心になって議論した議事録と思われる。大河内は「会員間の気持ちの交流を図ることを第一の目的にし、「専門家乃至大家に提はれてはならぬ」と発言している。

また、政治史・外交史の研究者は、大河内の資料から、彼の戦前の知識人論、戦争との関わり、河合栄治郎との関係などを知る手がかりを得たいと思うものですが、こういった資料は比較的少ないように思われます。ほぼ同時代の知識人である矢部貞治の関係文書などとは異なり、大河内一男の個人資料として、本史料群がやや弱いということは否めません。

最後に、外形的なことですが、「図書部」にここでいう「原史料」の一部が混在してしまっただけです。これも何らかの形で意識しておかないと利用の際に思わぬ不便を被ることになり得ます。大杉報告にある外務省の記録などは、明らかにここでいう「原史料」です。

しかし、念のために申し上げておけば、こうした問題があるということは、この史料群の貴重さをいささかも減じるものではなく、今後の調査に待つものが少なくないということに過ぎません。

おわりに

従来、大河内一男という人物については、あまり高い評価は与えられてこなかった様に思います。例えば、彼のライバルでもあった安井琢磨は、「(大河内は) 戦時中も評判よく、戦後も評判のよい学者、(ちょうど奇術師の) 天勝のようなものである」と言っておりますが、これでは研究意欲がわきません。また、大河内は、高島通敏「生産力理論—大河内一男・風早八十二」(1960年)でも批判的に紹介されていることがよく知られています<sup>2</sup>。

しかし、1990年代から、戦争の時代も戦後という時代も、歴史として、いわば客観的な研究対象としてとらえる視点が学界において獲得され、大河内一男(ら戦時協力者)の再評価もはじまりました。有馬学「戦前の中の戦後と戦後の中の戦前」(1988年)、三谷太一郎「戦時体制と戦後体制」(1993年)、山之内靖「戦時期の遺産とその両義性」(1993年)「戦時期の社会政策論」(1998年)などがそうした例です。また、「(日中戦争以後の大河内は)

<sup>2</sup> その他、戸塚秀夫「社会政策本質論争の一回顧」(1966年)、兵藤ツトム「労働経済」(1976年)など

フランクフルト学派の人々と同様に「ヨーロッパ諸学の危機」(フッサール)を、三木清(昭和研究会の中心人物の一人)を媒介として体験することとなった」(山之内靖「戦時期の遺産とその両義性」)という発言などを読みますと、1930年代以降の日本——それが大河内の活躍した時代ですが——の「特殊性」というよりは、「普遍性」を前提に国際的に比較する理解の中心に、大河内を位置づけることも出来るのでしょうか。これは、今後の研究の一つの方向を示唆するものだと思います。

さらに、前述のように、大河内一男は初期社会主義の歴史を自ら描きましたが、その中で、「(日本の社会主義運動においては)なぜ右と左との分派の対立がすぐできあがるのだろうか」「なぜ日本では、左派の非合法主義と直接行動主義に多くの者が拍手を送るのだろうか」「(大河内一男『幸徳秋水と片山潜』)という発言を残しております。日本の社会主義的な運動が「大衆からの遊離と運動としての崩壊と挫折」を繰り返してきたことへの強い批判が彼にはありました。この観点からいけば、彼は、日本の自由主義あるいは議会制民主主義の歴史を読み直す一つの視点も提供している存在なのです。

本文庫の原史料には、完全ではないにせよ、そういった論点を深めることが出来る貴重な記録が多数存在します。今後は、まず、整理を完成させ、利用のための目録の整理が何より必要です。また調査協力のためのネットワークも広げる必要があるでしょう。さらに、経済史・政治史・思想史だけでなく、労働経済・法制史・経済学など、多角的な視点からの学際的共同研究が是非とも必要です。本史料は、それだけの許容量をもつ史料群だと思いますし、そうでなければ、十分な活動は出来ないでしょう。また、さらなる史料発掘と寄贈の努力も必要だと思います。

本学さらには今日ご参加くださった皆様のかかわぬ協力をお願いして、私たちの報告を終えたいと思います。ご静聴ありがとうございました。(了)

(本報告書は、シンポジウム当時の報告を中心に、時間の関係で報告できなかった後半部分を補ったものである。当日の報告とは一部異なる部分があることをお断りしておく。)